

平成 23 年 7 月 27 日 (水) 午後 4 時

問合せ：大阪市鶴見区緑地公園 2-136
(財) 国際花と緑の博覧会記念協会
コスモス国際賞事務局：三谷彰一
<http://www.expo-cosmos.or.jp/>
090-6913-1445 (27 日のみ)
06-6915-4513 (花博記念協会)

2011 年コスモス国際賞受賞者は 「海洋生物センサス科学推進委員会」

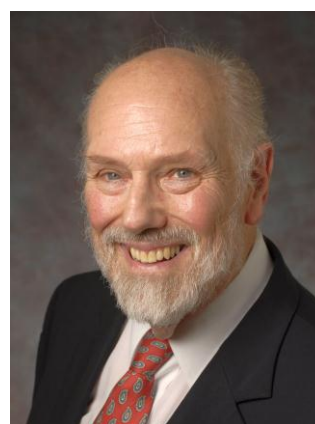
(Scientific Steering Committee of the Census of Marine Life : SSC)

花の万博記念「コスモス国際賞」委員会（委員長：岸本忠三）は、本年 6 月 27 日、選考専門委員会（委員長：松下和夫）からの報告を受け、海洋生物センサス科学推進委員会（事務局：アメリカ ワシントン DC）を 2011 年（第 19 回）コスモス国際賞の受賞者に決定した。

海洋生物センサス科学推進委員会（SSC）は、海洋生物の多様性、分布、生息数についての現在、過去を調査・解析し、そのデータを海洋生物地理学情報システム(OBIS)という統合的データベースに集積することにより、海洋生物の将来を予測する、壮大な国際プロジェクト「海洋生物センサス」(CoML)を主導した。



現委員長
イアン・ポイナー博士
Dr. Ian Poiner



初代委員長・共同創設者
フレデリック・グラスル博士
Dr. Frederick Grassle

写真画像ファイルは次の URL にあります。

<http://www.expo-cosmos.or.jp/2011.zip>

1. 授賞の対象

花と緑に象徴される地球上のすべての生命体の相互関係およびこれらの生命体と地球との相互依存、相互作用に関し、地球的視点からその変化と多様性の中にある関係性、統合性の本質を解明しようとする研究活動や業績であって、「自然と人間との共生」という理念の形成発展に特に寄与すると認められるもの。

上記の観点から、以下の点を重視する。

- (1) 分析的、還元的な方法ではなく、包括的、統合的な方法による業績であること。
- (2) 地球的視点にたった業績であること。
特定の地域や個別的現象に関するものであっても、普遍性があること。
- (3) 直接的な問題解決型ではなく、長期的な視野をもつ業績であること。

2. 2011年選考の経緯

平成23年1月から6月までコスモス国際賞選考専門委員会を4回開催し、141件を対象に審査した上、6月27日開催のコスモス国際賞委員会で受賞者を決定した。

<2011年コスモス国際賞の選考対象>

2009年分56件、2010年50件、2011年35件 合計141件(19カ国)

<国別内訳>

日本(49)、アメリカ(31)、イギリス(14)、中国(7)、インドネシア(6)、インド(6)、オーストラリア(5)、カナダ(4)、ケニア(3)、ドイツ(3)、ロシア(3)、チリ(2)、オランダ(2)、ベトナム(1)、ブータン(1)、フランス(1)、スウェーデン(1)、タンザニア(1)、アイルランド(1)

3. その他

(1) 授賞式

平成23年10月18日(火)、いずみホール(大阪市中央区城見)で行う予定。

(2) その他

受賞者には賞状、賞牌および副賞(4,000万円)を贈呈する。

添付資料

- ・ 海洋生物センサス科学推進委員会の主な委員等
- ・ 海洋生物センサスの経過
- ・ 授賞理由
- ・ 授賞理由の説明
- ・ 受賞者のコメント
- ・ その他(歴代受賞者、コスモス国際賞委員・選考専門委員名簿)

海洋生物センサス科学推進委員会の主な委員等

委員長 イアン・ポイナー Ian Poiner

生年月日： 1953年3月15日

国籍：オーストラリア

専門分野：熱帯海洋生態学

経歴

1976年 オーストラリア・クイーンズランド大学卒業 動物学専攻

1978年 オーストラリア・クイーンズランド大学博士号

1983年～1986年 オーストラリア連邦科学産業研究機構（Commonwealth Scientific and Industrial Research Organisation “CSIRO”）漁業部門研究員

1987年 カナダ・ブリティッシュコロンビア大学植物学研究フェロー

1988年～1997年 CSIRO 漁業部門上級研究員

1997年～2001年 CSIRO 海洋研究部門上級研究員

2001年～ CSIRO 海洋研究部門副所長

2004年～ オーストラリア海洋科学院（Australian Institute of Marine Science “AIMS”）CEO

2008年～ 海洋生物センサス科学推進委員会委員長

初代委員長・共同創設者 フレデリック・グラスル Frederick Grassle

生年月日： 1939年7月14日

国籍：アメリカ

専門分野：深海底生態学、海洋生物地理学

経歴

1961年 アメリカ・エール大学卒業

1967年 アメリカ・デューク大学博士号

1969年～1989年 アメリカ・ウッズ・ホール海洋学研究所上級研究員

1993年～1996年 アメリカ・ウッズ・ホール海洋学研究所非常勤研究員

1989年～ アメリカ・ラトガース大学海洋沿岸科学研究所教授

1989年～2008年 アメリカ・ラトガース大学海洋沿岸科学研究所所長

2000年～2008年 海洋生物センサス科学推進委員会委員長

副委員長 ビクター・A・ギャラード Victor A. Gallardo

生年月日： 1934年11月3日

国籍：チリ

専門分野：深海底生態学

経歴

- 1961年 チリ・コンセプション大学海洋学教授
- 1967年 アメリカ・南カリフォルニア大学博士号
- 1973年～1974年 アメリカ・ロードアイランド大学修士
- 2005年～ 海洋生物センサス科学推進委員会副委員長



副委員長 ミリアム・シブエー Myriam Sibuet

生年月日： 1945年7月30日

国籍：フランス

専門分野：深海生態学

経歴

- 1987年 フランス・パリ大学博士号
- 1969～2006年 フランス海洋調査研究所研究員、研究ディレクター
- 2006年～ フランス海洋調査研究所顧問
- 2006年～ パリ海洋学研究所名誉研究員
- 2008年～ 海洋生物センサス科学推進委員会副委員長



共同創設者 ジェシー・オースベル Jesse Ausubel

生年月日： 1951年9月27日

国籍・アメリカ

専門分野：環境科学技術

経歴

- 1974年 アメリカ・ハーバード大学卒業
- 1977年 アメリカ・コロンビア大学修士（国際関係及びビジネス管理）
- 1993年～ アメリカ・ロックフェラー大学人間環境プログラム・ディレクター
- 1990年～ アメリカ・ウッズ・ホール海洋学研究所研究員
- 1994年～2009年 アメリカ・スローン財団プログラム・ディレクター
- 2009年～ スローン財団副理事長



写真画像ファイルは次のURLにあります。

<http://www.expo-cosmos.or.jp/2011.zip>

海洋生物センサスの経過

- 1996年7月2日 フレデリック・グラッスル博士とジェシー・オースベル氏が、海洋生物多様性の科学的探究に関する大規模な国際協力プログラムについて話し合う。
- 1997年3月～
1998年8月 プログラムの範囲を定め、その実行可能性を探るワークショップを開催。
- 1999年1月 科学推進委員会を設置。科学推進委員会は、調査の方向性を示し、プログラムの目的達成を図る役割を担う。
- 1999年6月 科学推進委員会第1回会議を開催し、プログラムの目的を「海洋生物の多様性、分布、個体数の評価および説明」とすることに合意。
- 2000年5月 海洋生物地理情報システム（OBIS）の実証プロジェクトの立ち上げ。
- 2000年10月 「海洋の過去」についての研究を行う、海洋生物の個体数変遷の歴史調査(HMAP)プロジェクトが始動。
- 2001年10月 海洋生物地理情報システム（OBIS）が始動。
- 2001年4月～
2002年10月 海洋全体を、現時点で利用できる技術を用いて研究可能な6つの領域に分け、「海洋の現在」についての研究部門を設置。
- 2002年2月～
2004年6月 13の国／地域別の実行委員会（NRIC）を設立。
- 2002年11月 センサスの研究成果を一般市民に広く周知するため、教育・アウトリーチに関するイニシアティブを設立。
- 2003年6月 「海洋の未来」について研究する、海洋生物個体数の将来予測（FMAP）プロジェクトが始動。
- 2003年10月 第1回「オール・プログラム」会議を開催。データ、研究結果、アイデアを共有。
- 2004年4月～
2005年1月 「現在の海洋」研究を14のプロジェクトへと発展。
- 2005年11月 第2回「オール・プログラム」会議を開催。進捗状況などを検討。
- 2006年10月 第1回沿岸自然海浜（NaGISA）世界会議を開催、27カ国から130名以上の参加者が神戸に集う。

- 2007年7月～10月 世界的な取り組みの第2段階として、インドネシア、韓国、アラビア海で新たな NRICs を設立。
- 2007年10月 マッピング&ビジュアライゼーションおよび海洋生物の DNA バーコーディングに関する活動の立ち上げ。
- 2007年11月 第3回「オール・プログラム」会議を開催。データや研究成果を合成する計画を具体化。
- 2008年4月 合成グループ（Synthesis Group）を設置し、センサスが収集した膨大なデータや情報を取りまとめて、統合、合成し、2010年に向けた包括的な内容および成果物が確実に作成されるようにする。
- 2009年2月 第4回「オール・プログラム」会議を開催。合成（Synthesis）ワークショップとして構成。
- 2010年10月 センサス・プログラムでは、英国ロンドンにおいて、大規模な10ヵ年プログラムの知見を「発見の10年（Decade of Discovery）」として発表。第1次センサスによって、海洋生物は予想以上に豊かで、相互に関係をもち、大きな影響を受けているということが明らかになる。

授賞理由

「海洋生物センサス科学推進委員会（Scientific Steering Committee of the Census of Marine Life : SSC）」は、海洋生物の多様性、分布、生息数についての過去から現在にわたる変化を調査・解析し、そのデータを海洋生物地理学情報システム（Ocean Biogeographic Information System : OBIS）という統合的データベースに集積することにより、海洋生物の将来を予測することを目指す壮大な国際プロジェクト「海洋生物センサス（Census of Marine Life : CoML）」を主導した。

海洋生物センサスは、80以上の国や地域の2,700人もの研究者がネットワークを組み2000年から10年間実施された大規模海洋生物調査である。プロジェクトは過去・現在・未来を知るため、大きく3つに分けられ、過去の歴史的データを調査する「HMAP（History of Maine Animal Population）」は、水産学者、歴史学者、経済学者などが世界各地において、昔の船の航海記録、修道院の記録、レストランのメニュー、魚の骨、貝塚などの調査を行い、近代漁業開始以前の海洋生物の状態を示す記録を作り出した。

現在の海洋生物を扱う「Ocean Realm Field Project」は、14分野のフィールドプロジェクトを展開し、主要な浅海ハビタット（沿岸、サンゴ礁など）のほか熱水生態系、冷湧水生態系、中央海嶺、北極海などユニークな地域も調査対象とし、この調査には音響学、工学、遺伝学などが組み合わされ行われた。将来の予測を行う「FMAP（Future of Marine Animal Population）」は、漁業および気候変動など多くの異なるソースからデータを統合し、新たな分析手法の確立により、将来の海洋生物の個体数及び生態系を予測した。

このように、世界の全海洋を対象に、しかも数世紀前のデータから未来予測まで含んだ海洋生物センサスは、12万種の生物に対する2800万の研究項目を海洋生物地理学情報システム（OBIS）に登録し、その内容はインターネット上に公開され、世界の誰もが利用できるものとなっている。特筆すべきは、同データベースは毎年500万のデータが追加され続けている。

さらに海洋生物センサスは、研究成果を社会に還元する広報を積極的に展開した。芸術家、作曲家、映画製作者、漫画家や織物作家と協同するなど、科学調査の成果を多角的に社会に知らせる方法を同時進行的に行ったことは意義深い。また、次世代の海洋研究者育成のため、多くの青少年が沿岸生息地の生物に関する情報を収集する活動に参加する事業も展開した。

海洋と海洋生物について包括的な調査、理解を進めることは、科学・経済そして政治的にも重要である。生物多様性条約は、生物資源の情報を収集するよう締約国に求めているが、未だ、完全な情報を持っている国はない。海洋生物のセンサスで構築された研究者たちの世界的なネットワークは、海洋生物資源情報を集積し、生物多様性の保全や海洋資源の持続的利用等の施策を立案する上で大きな貢献を果たすものである。

海は、地球表面積の7割を占め、陸上に比べはるかに人類の手が及ばない未知の場所である。そこに住む生き物の歴史や多様性を調査した海洋生物センサスは、様々な分野の研究者が協同した学際的かつ統合的なプロジェクトである。まさに海洋生物センサスは、環境と密接に関わり合っている複合的なシステムを作っている生命系の本質を探ろうとするものであり、「自然と人間との共生」を掲げるコスモス国際賞に合致するものである。

海洋生物センサス科学推進委員会が、前例のない国際プロジェクトを統括、推進し、多大な成果を上げたことはコスモス国際賞の授賞にふさわしいと評価した。

授賞理由の説明

海は地球表面の約7割を占め、人類はさまざまな恩恵を受けてきたが、そこに住む生き物に関する知見は、はなはだ不完全である。2000年に「海洋生物センサス科学推進委員会（Scientific Steering Committee of the Census of Marine Life : SSC）」の主導で「海洋生物センサス（Census of Marine Life : CoML）」が始動し、10年の年限で海洋生物の多様性・分布・個体数を調べる取り組みを行った。

「海洋生物センサス」は、過去の海にどのような生物がいたのか、現在の海にはどのような生物がいたのか、将来海にはどのような生物が生きられるか、の3つの課題を基本フレームワークとし、80を超える国や地域、すべての大陸にある670を超える研究機関、大学、自然史博物館、水族館からの2700人もの研究者たちが関わった壮大な大規模海洋生物調査である。

歴史的な調査プロジェクトである「HMAP (History of Marine Animal Populations)」は、人類が海洋生物に影響を与えるようになった500年前からのデータを集め、例えば1900年代半ば以降北欧のクロマグロの資源減少や1960年代から1990年代にかけての種多様性の変化を解明した。これらは、水産学の研究者、歴史学者、経済学者などのチームが、南アフリカ、オーストラリアなど12の地域でケーススタディを行うと共に、昔の船の航海記録、修道院の記録、レストランのメニュー、魚の骨、貝塚、その他の信憑性のある文書に基づいて、世界で初めて、信頼性の高い漁業開始以前の海洋生物の状態を示す記録を作り出した結果によるものである。

海洋生物の個体数の長い変遷の記録は、自然環境における正常な範囲の変動と人類の活動による影響とを区別するのに役立つものとして、高く評価できる。

現在の海洋生物を扱う「Ocean Realm Field Project」は、14分野のフィールドプロジェクトを展開し、11分野は、サンゴ礁などの浅海ハビタットの他、海山、湧水域、北極海、南大洋、大西洋中央海嶺のようなユニークな生息地も対象にした。残りの3分野では、水塊中の主要な生物であるプランクトンや微生物、食物連鎖の上位にいるマグロなどを全海洋規模で研究した。これらのプロジェクトでは、音響ソナーや音響タギング、通信衛星、DNA解析、大型調査船、深海調査船など様々なテクノロジーを組み合わせられて行われた。

未来予測をするグループ「FMAP (the Future of Marine Animal Populations)」は、漁業および気候変動など多くの異なるソースからのデータを統合し、新たな分析手法の確立により、将来の海洋生物の個体数および生態系を予測した。

海洋生物センサスのデータは、「OBIS (Ocean Biogeographic Information System)」という検索エンジン型のデータベースで公開し、インターネットを通じて世界中の誰もが利用できるようになっている。現在、11万種を超える種と、2800万件の分布データが登録されているが、今でも500万件/年のデータが追加登録されていることは、最新の知見が得られるものとして利用価値が高いと評価できる。OBISは、生物の学術名や一般名を入力すると、その生物がいつ、どこで発見されたかが地図上に表示されるため、研究に役立つだけでなく、一般の人々も楽しむことができるものである。

さらに海洋生物センサスは、一般市民に成果を周知する広報も積極的に展開した、芸術家、作曲家、映画製作者、漫画家や織物作家と協同して活動を行うなど、科学調査の成果を、広く社会に知らせることも行った。発見された美しくユニークな生き物の姿は、様々な作品（造形物、映画、漫画、キルトなど）となった。

また、次世代の海洋研究者の育成に寄与するため、多くの青少年が沿岸生息地の生物に関する情報を収集する活動に参加する事業も展開した。

海洋と海洋生物について包括的な調査、理解を進めることは、科学的にも経済的にも、そして政治的にも重要である。生物多様性条約は、生物資源の情報を収集するよう締約国に求めているが、未だ、完全な情報を持っている国はない。海洋生物センサスで構築された研究者たちの世界的なネットワークによる海洋生物資源情報の集積は、全海洋の海洋生物の将来の変動が予測のソースとなり、生物多様性の保全や海洋資源の持続的利用等の施策を立案する上で大きな貢献を果たすものである。

海にはたくさんの生き物が住んでいるが、人類はその大半を知らない。海洋生物の歴史や多様性を調査した海洋生物センサスは、様々な分野の研究者が協同した学際的かつ統合的なプロジェクトであった。まさに海洋生物センサスは、環境と密接に関わり合って複合的なシステムを作っている生命系の本質を探ろうとするものであり、「自然と人間との共生」を掲げるコスモス国際賞に合致するものとして評価した。

受賞者のコメント

花の万博の「自然と人間との共生」という理念をルーツとするコスモス国際賞が、今回は青い海の世界に着目されたことに、大きな感動を覚えます。私たちは、例えば庭に咲く花の四季折々の変化など、毎日地上の美しい自然を目にする機会があります。しかし最近まで、人類は、広く深く深い海に棲む生物をほとんど目にするできませんでした。一部の海洋生物は水族館で紹介されるようになりましたが、海洋生物の包括的なリストも作成できていないばかりか、未発見の海洋生物がどれほど存在するかについて、信頼に足る推定もできていなかったのです。

1990年代後半、海洋学者たちは、新しい技術と国際協力によって、第1期海洋生物センサスの実施が可能であると確信するに至りました。その目的は、海洋生物の調査と記録において、極洋と熱帯海、浅海と深海、大型生物と小型生物に関連を見出すことでした。私たち海洋生物センサス国際科学推進委員会のメンバーは、80を超える国や地域の2,700名以上もの研究者の参加を促し、支援をするという栄誉に恵まれました。センサスの理想を実現に導いて下さった研究者一同を代表し、謹んでコスモス国際賞をお受けいたします。相互の才能の発見や、その結果生まれた信頼関係や尊敬の念は、世界の海洋の謎を解き明かすに足る、センサスの残した大きな遺産となりました。

また、私たち科学推進委員会は、海洋科学や生物多様性科学を支援し、コーディネートして下さった海洋研究所や大学、自然史博物館や水族館、各国海軍、政府機関、政府間組織並びに技術・財政面の援助を賜りました民間企業および財団の皆さまに感謝の意をお伝えしたいと思います。また、センサスの実現性評価および10年にわたるセンサスのコーディネートのために、資金を提供していただいたニューヨークのアルフレッド・P・スローン財団に深く御礼申し上げます。

センサスがマイクロとマクロの両方の世界を探索したことも、私たちの誇りとするところです。センサスは1,200以上の新種についての詳細な説明を提供しました。誰もが自由にアクセスできる最新のデータベースに統合されている数千万の調査結果に基づき、海洋生物の多様性、分布、個体数に関する地球規模のパターンを発見しました。海洋生物がその美しさと神秘性で芸術家、歴史家、自然科学者を魅了したこと、またセンサスが、人間の持つあらゆる観察力が見事に結集したものとなったことを喜ばしく思います。それから、私たちの想像以上に、海洋はずっと豊かで、密接につながり合い、大きく変化してきたのだということも学びました。

私たちがこの非常に栄誉あるコスモス国際賞を受賞したことで、海洋が「自然と人間との共生」のシンボルとなれることが示されることを願っております。新しく発見されたもの、既に喪失したことが判明したもの、また発見に至っていないことが判明したものも含め、センサスによって得られた知見により、早急に「自然と人間との共生」を実現することの重要性が示されました。その実現は、後世の人々に対する最高の贈り物となります。地球上でもっとも大きな「庭」である海は、大自然そのものでもあります。

海洋生物センサス科学推進委員会
委員長 イアン・ポイナー

コスモス国際賞歴代受賞者

1993年（第1回）受賞者 ギリアン・フランス卿

イギリス 王立キュー植物園園長

南米アマゾン地域を中心とする熱帯植物研究の権威。地球全域の植生を統一データ化する「地球植物誌計画」を提唱、世界の植物学者とネットワークを組んで実現に努力した。

1994年（第2回）受賞者 ジャック・フランソワ・バロー博士（物故者）

フランス パリ国立自然史博物館教授

太平洋の島々の自然と人々の暮らしについて民族生物学的な調査、研究を行い、これをもとに人間と食糧をテーマに、全地球的な視点からユニークな考察を発表した。

1995年（第3回）受賞者 吉良龍夫博士（物故者）

日本 大阪市立大学名誉教授

光合成による植物の有機物生産の定量的研究をもとに、生態学の新分野となる生産生態学を確立。東南アジア地域の熱帯林生態系の研究で指導的な役割を努めた。

1996年（第4回）受賞者 ジョージ・ビールズ・シャラー博士

アメリカ 野生生物保護協会科学部長

40年にわたり、世界各地で様々な野生生物の生態と行動を研究。『マウンテンゴリラ・生態と行動』『ラストパンダ』など数多くの著書で全世界に野生動物の実態を知らせた。

1997年（第5回）受賞者 リチャード・ドーキンス博士

イギリス オックスフォード大学教授

1976年に出版された著書『利己的な遺伝子』で、生物学の常識を覆す大胆な仮説を発表。その後も、生物の進化について新しい見解を提示して、学会に論争を起こしている。

1998年（第6回）受賞者 ジャレド・メイスン・ダイヤモンド博士

アメリカ カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授

医学部教授として生理学を研究する一方、40年にわたりニューギニアの熱帯調査を行い、これらを基に人類の歴史的な発展を再構成したユニークな考察を発表した。

1999年（第7回）受賞者 呉征鎰（ウー・チェン・イー）博士

中国 中国科学院昆明植物研究所教授・名誉所長

中国を代表する植物学者。中国を拠点に東アジア地域の植物の調査研究に取り組み、中国全土の植物の種の多様性を網羅する『中国植物誌』の編集を主導、刊行を実現させた。

2000年（第8回）受賞者 デービッド・アッテンボロー卿

イギリス 映像プロデューサー、自然誌学者

野生生物のドキュメント映像のパイオニア。BBC時代から退社後を含め、約半世紀にわたって、地球上の野生の動植物の生の姿を、優れた映像で全世界に伝えた。

2001年（第9回）受賞者 アン・ウィストン・スパーン教授

アメリカ マサチューセッツ工科大学教授

都市と自然は対立するものでなく、周辺の地域環境と調和し、その一部として存在する都市の構築が可能であるとし、都市が自然との調和をはかりながら発展する方策を示した。

2002年（第10回）受賞者 チャールズ・ダーウィン研究所

エクアドル・ガラパゴス諸島

1964年設立の国際的NGO・NPO組織。南米エクアドル領のガラパゴス諸島で、ゾウガメ、イグアナなど、特異な固有生物の調査研究と保護に当たっている。

2003年（第11回）受賞者 ピーター・ハミルトン・レーブン博士

アメリカ ミズーリ植物園園長

アメリカを代表する植物学者で、地球の生物多様性の保全を提唱した国際的な先駆者。常に地球的な視点で生命の問題を考え、学術と実践両面で自然と人間との共生に貢献した。

2004年（第12回）受賞者 フーリャ・カラビアス・リジョ教授

メキシコ メキシコ国立自治大学教授

途上国の立場から全地球的な環境問題を考え、フィールドワークとさまざまな学問分野の研究を統合したプログラムを実施し、異なる条件下での困難な課題に優れた成果を挙げた。

2005年（第13回）受賞者 ダニエル・ポーリー博士

カナダ ブリティッシュ・コロンビア大学水産資源研究所所長・教授

漁業と海洋生態系の関連を包括的に研究。海洋生態系保全と水産資源の持続的利用を可能にする科学的モデル開発など、海洋生態系と資源研究の分野で優れた業績を収めた。

2006年（第14回）受賞者 ラマン・スクマール博士

インド インド科学研究所 生態学センター・教授

ゾウと人間との生態関係や軋轢への対処をテーマとした研究から、生物多様性保護と自然環境の保全全般にわたる多くの提言を行い、かつ実行し、野生生物と人間との共存という分野での先駆的な取り組みを行なった。

2007年（第15回）受賞者 ジョージナ・メアリー・メイス博士

イギリス ロンドン大学自然環境調査会議個体群生物学研究センター所長兼教授

絶滅危惧種を特定・分類し、科学的な基準を作成することにおいて指導的役割を果たし、種の

保全、生物多様性保全に大きく貢献する取組みを行なった。

2008年（第16回）受賞者 ファン・ゲン・ホン博士

ベトナム ハノイ教育大学名誉教授

戦争や乱開発がマングローブの生態系に壊滅的な打撃を与えたベトナムで、マングローブの科学的、包括的な調査・研究を行い、マングローブ林の再生に大きな成果をあげた。

2009年（第17回）受賞者 グレッチェン・カーラ・デイリー博士

アメリカ スタンフォード大学教授

人類社会が依存する生物多様性のもつ「生態系サービス」の価値を包括的に捉えて、「国連ミレニアム生態系評価」など国際的な取り組みに貢献するとともに、生態学・経済学を統合し、自然資本の持続的な利用のために「自然資本プロジェクト」を実施する等大きな役割を果たした。

2010年（第18回）受賞者 エステラ・ベルゲレ・レオポルド博士

アメリカ ワシントン大学教授

父アルド・レオポルド氏（1887－1948）が提唱した「土地倫理」を継承・追及すると共に、アメリカ各地においてこの考えを広げるなど、多大な功績を残した。

花の万博記念「コスモス国際賞」委員会委員
The Expo '90 Commemorative International Cosmos Prize Committee

2011.1(五十音順)

役職 Position	氏名 Name	専門分野 Specialty	職名 Official Title
委員長 Chairperson	岸本 忠三 Dr. Tadamitsu Kishimoto	免疫学 Immunology	大阪大学大学院生命機能研究科教授 Professor, Graduate School of Frontier Biosciences, Osaka University
副委員長 Vice- Chairperson	古在 由秀 Dr. Yoshihide Kozai,	天体力学 Celestial mechanics	日本学士院第2部部長 Chairperson of Section II, The Japan Academy
委員 Member	岩槻 邦男 Dr. Kunio Iwatsuki	植物分類学 Systematic Botany	兵庫県立人と自然の博物館館長 Director, Museum of Nature and Human Activities, Hyogo
委員 Member	尾池 和夫 Dr. Kazuo Oike	地震学 Seismology	財団法人国際高等研究所所長 Director, International Institute for advanced Studies
委員 Member	グンナー・ホークスト Dr. Gunnar Öquist	植物学 Botany	前スウェーデン王立科学アカデミー事務局長 Former Secretary General, The Royal Swedish Academy of Sciences
委員 Member	黒川 清 Dr. Kiyoshi Kurokawa	医学 Medical Science	元日本学術会議会長 Former President, The Science Council of Japan
委員 Member	小山 修三 Dr. Shuzo Koyama	文化人類学 Anthropology	吹田市立博物館館長 Director, Suita City Museum
委員 Member	A. H. ザクリ Dr. A. H. Zakri	遺伝子学、育種学 Genetics, Plant breeding	元国連大学高等研究所長 Former Director, The United Nations University, Institute of Advanced Studies
委員 Member	鈴木 昭憲 Dr. Akinori Suzuki	農芸化学 Agricultural Chemistry	東京大学名誉教授、秋田県立大学名誉教授 Professor Emeritus, University of Tokyo Professor Emeritus, Akita Prefectural University
委員 Member	中村 桂子 Dr. Keiko Nakamura	生命科学 生命誌 Biohistory	JT 生命誌研究館館長 Director General, Biohistory Research Hall
委員 Member	ホル・フリップソン Ambassador Ole Philipson	国際政治学 International Politics	博覧会国際事務局(BIE)名誉議長 President of honor, Bureau International des Expositions, Paris (BIE)
委員 Member	ギリアン・プランズ卿 Sir Ghillean Prance	森林植物学 Forest Botany	エデン・プロジェクト科学部長 Science Director, the Eden Project
委員 Member	松下 和夫 Mr. Kazuo Matsushita	環境政策論 Environmental Policy	京都大学大学院地球環境学学堂教授 Professor, Graduate School of Global Environment Studies, Kyoto University
委員 Member	村上 陽一郎 Dr. Yoichiro Murakami	科学史 History of science	東洋英和女学院大学学長 President, Toyo Eiwa University

花の万博記念「コスモス国際賞」選考専門委員会委員
The Expo '90 Commemorative
International Cosmos Prize Screening Committee of Experts

2011.1 (五十音順)

役 職 Position	氏 名 Name	専門分野 Specialty	職 名 Official Title
委員長 Chairperson	松下 和夫 Mr. Kazuo Matsushita	環境政策論 Environmental Policy	京都大学大学院地球環境学堂教授 Professor, Graduate School of Global Environment Studies, Kyoto University
委員 Member	秋道 智彌 Dr. Tomoya Akimichi	生態人類学 Ecological Anthropology, Ethno-Biology	総合地球環境学研究所副所長・教授 Professor Deputy Director-General, Research Institute for Humanity and Nature
委員 Member	今福 道夫 Dr. Michio Imafuku	動物行動学 Ethology	京都大学名誉教授 Professor Emeritus, Kyoto University
委員 Member	餌取 章男 Mr. Akio Etori	科学評論 Scientific Review	(独) 物質・材料研究機構アドバイザー Advisor National Institute for Materials Science
委員 Member	加藤 雅啓 Dr. Masahiro Kato	植物分類学 Systematic Botany	国立科学博物館植物研究部長 Head, Department of Botany, National Science Museum
委員 Member	武内 和彦 Dr. Kazuhiko Takeuchi	緑地環境科学 Landscape and Environmental Science	東京大学大学院農学生命科学研究科教授 Professor, Graduate School of Agricultural and Life Science, the University of Tokyo
委員 Member	野家 啓一 Mr. Keiichi Noe	科学哲学 Philosophy of Science	東北大学大学院文学研究科教授 Professor, Graduate School, Faculty of Arts and Letters, Tohoku University
委員 Member	鷺谷 いづみ Dr. Izumi Washitani	生態学・保全生態学 Ecology, Conservation Ecology	東京大学大学院農学生命科学研究科教授 Professor, Graduate School of Agricultural and Life Science, the University of Tokyo
委員 Member	エンダン ・スカラ Dr. Endang Sukara	微生物学 Microbiology	インドネシア科学院副院長 Vice Chairman of the Indonesian Institute of Sciences
委員 Member	ジェームズ ・エドワーズ Dr. James L. Edwards	生物分類学 Systematic Biology	アメリカ国立自然史博物館顧問 Senior Advisor, National Museum of Natural History